

高度経済成長期における都市青年の社会運動

—日本都市青年会議の設立経緯と初期の関心を中心として—

大山 宏（東京大学大学院）

1. はじめに

1960年代から1970年代にかけては、青年の社会的位置づけが大きく変化していた時期であった。1960年代は学生闘争の激化も相まって進学組を中心とした青年たちの政治的活動が注目されていたが、1972年の連合赤軍事件を契機としてそうした政治活動が終焉を迎え、その後は段階的にはあるものの若者が政治と切り離され、「シラケ世代」や「モラトリアム人間」といった表現を為されるようになっていく。小谷敏¹が1970年代後半の青年批評は先行する成人との断絶性・異質性において青年を捉えるものであり、80年代若者論への端緒を開いたと指摘しているように、高度経済成長期からの流れを受けつつ、1970年代頃に現代につながる青年の捉え方が形成されていったと考えられる。また、社会教育領域においてもほぼ同時期に青年に関する論調の変化が指摘されている。例えば那須野隆一²は1960年代までの青年期教育に関する研究では、『青年の生活・形成過程と教育・学習過程とをなほどこ結びつけて検討するという意味での実態統合的な視点が見られた』とする一方で、1970年代以降の研究ではそれが崩れ去っていると指摘している。また1985年発行の『日本の社会教育第29集 現代社会と青年教育』では、そのまえがきで1970年代に入る頃から社会教育における青年の教育・学習の組織化が困難を抱えるようになり、その後その困難さは解消されていないと記されている。1970年代以降の社会教育分野における青年期教育の論点は主に若者の集団化にあり、特に学習につながる生活集団の構築が求められてきたのだと考えられる。

こうした観点は、それぞれに1970年代頃を境として、青年の社会参加の方策が変化し、あるいは課題を抱えるようになったとするものとして捉えられるであろう。しかし、1970年代以降青年の集団化とそれによる社会参加の実態については、衰退とされたものが事実なのか、あるいはどのように進化したのかはあまり検討されてこなかったのではないか。本発表ではこうした課題意識から、1960年代後半から70年代前半にかけての青年像について再検討し、彼らがどのようにして社会参加を行っていたのかを明らかにしていくことを目的としている。

なお、本発表では「社会運動」を広く社会に対し働きかける営為として捉え、社会参加の具体的・実践的側面として位置づけ言及していく。

2. 対象

¹ 小谷敏編『若者論を読む』世界思想社,1993

² 那須野隆一「青年期教育の基本的視点」,日本社会教育学会編『日本の社会教育第29集 現代社会と青年教育』東洋館出版社,1985

本発表では1960年代後半から1970年代にかけての日本都市青年会議（以下、日都青）の設立過程について、その前身となった五大市青年団体協議会や、下部組織である各都市の青年団体協議会等の資料も用いながら検討していく。日都青は1969年に設立された全国組織であり、青年自身の手によって自らが生活する場である地域（都市）の環境改善を目的とし、また実際にそうした働きかけを行うことで社会参加の活動として展開してきたものであった。日都青の設立から初期の取り組みについては、日都青が1999年に発刊した『都市青年団体活動読本』に最も簡潔にまとめられている。

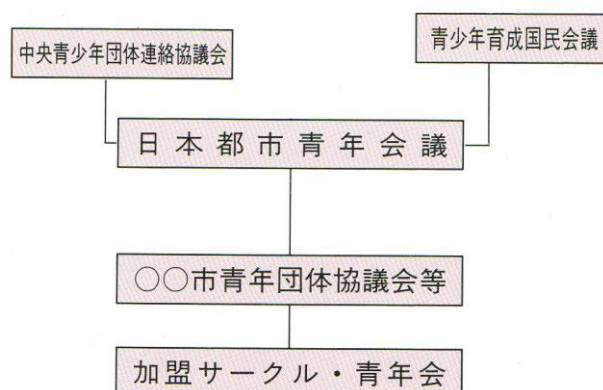
日都青の前身となる五大市青年団体協議会は、青年たちの“より充実された自己の人間形成と、明るい民主的な社会を築くため（中略）日々の歩みの中から活動を推し進めていく確固たる理論と整備された組織の確立”が必要であるという課題意識により1953年に横浜・名古屋・京都・大阪・神戸の五つの都市の青年が横浜市に集まり、大都市に共通した悩みや問題について相互学習の機会を設けたことがきっかけとなって発足することとなった。このとき都市部の青年だけで集まったのは、都市において特に青年団体活動の難しさが指摘されていたということもあるが、何よりも既存の青年団体の取り組みに対して、都市青年自身が不満を抱いていたということが大きいであろう。1963年に発行された神戸市青年団体協議会機関紙「青年神戸」には、“日本青年団協議会は、日本の唯一の青年団体組織の総本山ではあるけれども、それらの内容を見る時に、農村を主体にするものであり、（中略）日本の中で、五大市の青年団体を無視して都市を語るわけにはいかない。少なくとも五大市の意見なり、五大市の内容を良く理解して、その中で日青協が都市の考えを発表するのであればうなずけるが今日までのあり方ではそれは望めない”とする記事が掲載されている。

また、こうした不満が出ることから、都市には農村とは異なる固有の課題があり、農村中心の観点では都市の問題を捉えきれないのではないかと、都市青年自身が危惧していたことがわかる。その都市固有の課題とは、「青年と社会参加」と考えられており、1969年の日都青第1回大会以後も一貫して討議されてきたテーマであるとされている。

以後、1971年に第2回大会を京都で、1972年に第3回大会を東京で開催するに至るが、ここで組織の運営において大きな課題となったのが、財政的裏付けの無さであった。この問題に対処するため、後に日都青の初代会長となる小西義行らが文部省に日参し、補助金の交付を求め、文部省からは補助金交付のために提示された条件に応じる形で事務所の設置や規約の制定等に取り組んだことで、次第に組織が確立していくこととなる。特に第3回東京大会は、全国32都市から190名余りの参加者があり、組織としての日都青の方針が決定される等、重要な大会となり、これらの取り組みを受け、1973年の第4回名古屋大会からは文部省の補助金も交付され、以後は安定した組織運営が可能となったとされる。これらのことから、ここでは1972年までを日都青の創設期と位置づけ、主要な対象として検討を行う。

また、日都青は市町村毎の青年団体連絡協議会等を単位として加盟することを前提としており、活動の位相としては全国組織としての日都青・市町村単位の連絡協議会・具体的に活動を行う単位サークル等という三層構造をとっている（下図）。そのため、ここでは日都青名目の資料だけでなく、その下部組織である連絡協議会や単位サークルの資料も用い、日都青の取り組みが実際に活動する青年たちにとってどのような意味を持っていたの

かについて検討していく。



3. 主要資料

日本都市青年会議関係

- ・ 第1回日本都市青年会議報告書（69年度）
- ・ 第2・4回日本都市青年会議開催要項（71・73年度）
- ・ 第2回日本都市青年会議案（71年度）
- ・ 第3・4回日本都市青年会議しおり（72・73年度）
- ・ 日本都市青年会議組織構想案メモ（72年度）
- ・ これからの日本都市青年会議のあり方（案）メモ（72年度）
- ・ 日本都市青年会議編『都市青年団体活動の実態調査（速報版）』1979
- ・ 日本都市青年会議編『日本都市青年会議記念誌 あゆみ』1985
- ・ 日本都市青年会議編『都市青年団体活動読本』1999

五大市青年団体協議会関係

- ・ 第17回五大市青年団体協議会しおり（69年度）
- ・ 第12・15・16回五大市青年団体指導者講習会しおり（71・74・75年度）
- ・ 第13・14回五大市青年団体指導者講習会報告書（72・73年度）
- ・ 第15回五大市青年団体指導者講習会参加者感想（74年度）
- ・ 第16回五大市青年団体指導者講習会速報（75年度）

各都市の青年団体関係

- ・ 横浜サークル協議会のしおり（1966年度）
- ・ 横浜サークル協議会・名古屋サークル連絡協議会交歓大会報告書（66年度）
- ・ 横浜サークル協議会機関紙「サークル通信」（68年度分）
- ・ 第9・11・12回横浜サークル協議会総会議案書（72・74・75年度）
- ・ 横浜市サークル「杉の仲間の会」連絡ノート（72・73年度分）
- ・ 東京都青年団体連合『利用者の立場から見た社会教育施設 東京の青年活動と施設』1969
- ・ 神戸市青少年団体連絡協議会『STEP UP New SRK』1996

4. 日都青における社会運動論

日都青第1回大会の記録には、“「現代の青年」は聞かれれば、まずヘルメットにゲバ棒を持つ学生と夜の歓楽街にたむろする若者を思い浮かべるほど世の中にはそのようなニュースが氾濫している。しかし、その陰には社会の各方面に地味な努力を続ける多くの健全な青年がおり、国家を支える大きな力となっていることを認識したい”という記述がある。これは日都青が当時一般的に認識されていた青年像とは違う青年像を自認していたことの表れであろう。

こうした青年観は社会との関わり方についての言及においても見られる。日都青における議論の内容について、日都青結成15周年記念誌である『あゆみ』ではいくつかの論点に整理しているが、そのうち最初に取り上げられているのが、青年と社会参加の問題であり、そこで問われるのが、青年の社会参加の道筋をどのように構想するのかである。1969年の日都青第1回大会では「青年と町づくり」が“最も基本的なテーマ”として位置づけられ、第2回京都大会で掲げられた「未来都市創造のために青年の声を地域社会に反映させよう」というスローガンに引き継がれていったとされるが、ここでの社会参加とは町づくりへの参加であり、青年の声を彼ら自身が生活している地域社会にどのようにして反映させていくかが問われていたと考えられる。実際に大会の分科会テーマを見ても、第1回大会の「青年と交通問題」や「青年と住宅問題」、第2回大会の「都市青年と社会環境」「食品・薬品公害」のように、生活の中で感じられる身近な課題を取り上げ、それに対して何ができるのかを問いなおしていくことで、地域社会の改善に資する活動を行おうという姿勢が見て取れる。

こうした取り組みは「ヘルメットにゲバ棒を持つ学生」の運動とは異なり、自らの生活に立脚しながら社会に働きかけていくものとして捉えられていた。サークル等の団体が協働することで社会運動化していくという視点が打ち出されており、例えば横浜サークル協議会機関紙を見ると、「社会的位置づけを」（5巻1号）、「青年活動考察の一面」（5巻3号）「青年運動の展望」（5巻5号）のように、協議会の活動を運動的に捉える記事が散見されるが、これは自分たちの活動を展開していくために社会への働きかけが必要であるという観点から論じられているものが多い。また、後年の記述にはなるが、1999年に日都青のあゆみをまとめた冊子である『都市青年団体活動読本』の中では、“第1回大会のねらいは、むずかしい討論を展開するのではなく、青年の身近な街の中のテーマをひろい上げてできるだけやさしく、そして誰でもが取りくめるようにした”とされ、そのために大会テーマを「青年と街づくり」とし、青年に直接つながる社会環境の問題を取り上げていたことに言及されている。また日都青の意義として各都市の青年問題を論じ、それを国政に反映させていくことが志向されており、少なくとも中心的に関わっていたメンバーは社会運動としての意識を強く持っていたことがわかる。

5. 単位サークルにおける運動の実態

一方で、1960年代の時点で都市部におけるサークル等の青年集団は参加が当為のものではなかった。1968年度の横浜サークル協議会³の通信で、サークル協議会に求めるものが

³ 横浜市においては1977年に横浜市青年団体連絡協議会が設立され、以後日都青にはこの団

多様化していることが指摘される等、関わり方も人によって異なっていたことがうかがえる。また、関わり方の多様さは全国組織としての日都青への意識にも表れており、多くの青年にとって日常的な活動の場であるサークル等の団体があるが、そこから協議会等に出て来るのは一部の青年のみとなり、日常的な活動の場としての単位サークルと、都市の協議会、さらには全国組織である日都青との間に、青年の意識のずれが生じていたことも指摘されている。

実際の活動の場としての単位サークルは、そこに所属する青年たちの生活に密接に関わっている一方で、多くの青年たちにとって運動というよりも、青年同士の交流・親睦の場として位置づけられていたと考えられる。例えば 1966 年の時点での横浜サークル協議会の加盟団体一覧を見ると、団体の目的として「親睦」や「交流」といった単語を使用している団体が 18 団体中 11 団体にのぼっている。この他に「人間関係の形成」等の表現をしている団体もあり、相当数の団体が団体内部での青年同士の交流を主要な目的の一つに据えていたことがうかがえる。言い換えれば青年たちの中で「交流」に対するニーズがそれだけ高まっていたといえ、都市空間における青年たちの孤立・孤独が大きな課題となっていたといえる。また、横浜サークル協議会所属のサークルが 1972 年から 73 年にかけてメンバー同士で共有していた連絡帳の記述を見ると、まるで日記のようにその日の個人的な経験について記述している人が一定数存在している他、特に用事が無くても拠点に人が集まっていることを示す記述も多い。1 冊のノートに 117 回の書き込みがあるが、そのうち約半数にあたる 58 回は日常の出来事について書かれており、その中には無目的に誰かに会いたくて集まっていることを示す記述も目立つ。こうした記述からは、単位サークルに所属する多くの青年たちは、楽しさや寂しさといった素朴な感情に突き動かされて集団を形成していたことを見て取ることができる。

7/1	7 時 40 分にいこいの家につきました。だれもいませんでした。(中略) 8 時 20 分、A さんがきました。B さんに用があると。もっとほかの人も来てくれないかなァ。連絡しとけば良かった。
9/9	今日は雨。皆さんきてないかなと思っていこいの家に電話してみました。どうでしょう、だいぶきていたんですよ。へエーて!! 感心しちゃった。
10/25	今日は別に例会日でもないのにやって来ました。(後略)
10/31	例によって別にこれと言った事もしないのにやってきた。(中略) 7 時半に B さんが顔を出した。なるほどもうすこし待てばこりやまだまだくるかもしれないゾ。
3/30	何となく、仕事が終り、いこいの家へ、気がさそう。別に用はないが若者が集まる。この家は心が休まる。
4/10	今日は C 君が皆でカウベルへ行こうなんて提案したので例会日でもないのにやって来たわけです。あいにくの雨、ホントにやりきれない。(後略)
4/28	今日この室にはいっておどろきました。新しい仲間がだいぶまじって D 君達を中心に楽しそうに話してました。やるもんですね。(後略)

体が加盟することとなる。横浜サークル協議会は青年団体連絡協議会が設立される際に、横浜市連合青年団等と並んで中心的な役割を果たした団体である。

8/11	若いみなさんはプライベートタイムの時間だけど、小生デートする相手はいないし、結局この場に遊びに来るのだが、あいにくと本日は私一人。(後略)
9/8	最近なんといったら良いか以前の様なやる気が出てこないのです。自分でお前は何のために杉の仲間にくるのか、なんとなくヒマだからさ。家にいても面白くない。それじゃ楽しくないだろ。でも結局こんなもんじゃないかな。皆なんとなく集まって、いつのまにか消えてゆく。こんなものかもしれません。(後略)

6. 全国レベルの議論と地域の実践

単位サークル等に参加する多くの若者と、そこから青年団体連絡協議会や日都青に出てくる若者の間の意識のずれは、その後も日都青で大きな課題として位置づけられ続けていくこととなる。一方で、そうした状況にあって全国レベルで行う議論をどのように位置づけるかについては、日都青の初期の段階からかなり意識的に検討されていた。

全国レベルで展開される議論と、各地域での実践は、青年の生活のあり方に対する課題意識によって関連付けられていたといえる。これは1972年の日都青第3回大会で出された「東京宣言」で、大会での議論を単なる情報交換や交流にとどめるのではなく、各都市における活動を積極的に展開していくためのものとして位置づけることが明記されていること等に見てとることができる。つまり、日都青の議論は単位サークル等での日常的な取り組みから乖離したものではなく、むしろ日常の取り組みを前提としてその発展に資することを目的としたものであることが示されており、これによって生活空間としての地域の改善に取り組んでいくことが目指されていたのだといえる。言い換えれば、日都青における社会運動・社会参加観は、単位サークルや各都市の青年団体連絡協議会レベルの取り組みにかなりの部分を依存しており、日都青の議論がそうした草の根とも言える活動とどのように関連しながら進められていたのかという点にこそ、日都青という団体の社会的な意義が現れていたと考えるべきであろう。そして各都市における青年の活動は、青年の寂しさや楽しさといった素朴な感情を土台とし、自らが暮らしやすい地域にしていこうとするならば良いかという問いによって進められていたのである。

また、第3回大会直後に出された「これからの日本都市青年会議のあり方(案)」という文章では、「私たち都市に生活する青年がいまこそ全ての創造的で情熱的なエネルギーを結集し、主義主張や、世代の断絶、地域的格差をのりこえて「未来を真に私たちのものに」という大命題に向って、揺ぎなき第一歩を踏み出さねばならない」と記されており、都市空間が内包する多様性についても意識が向けられていたことが示されていることも、日都青における議論の一つの特徴を示している。ほぼ同時期に、1973年の日都青第4回大会で出された名古屋宣言の中で、余暇を主体的・創造的に展開していくための場として「子供から老人までも参加できる新しい場を我々の手で作りださねばならない」と言及されていることから、広く地域社会の中に青年という存在を位置づけようとしていることがうかがえる。学生運動をはじめイデオロギー対立による運動がまだ影響力を残していた1970年代初頭に、多様性を前提とした運動像を提示していたことは注目に値する。